

ossignclass@gmail.com, nharada@tmu.ac.jp, chieko.tkym@gmail.com

1. はじめに

手話言語では、手話の表出者が他者の視点を取って命題を表現するロールシフト (role shift; 以下 RS と省略)が頻出する。従来の研究では、RS は主にその非手指表現 (目線・頭・体の向きなど) を指標として分析されてきた。本研究では、日本手話の RS においてこれまで観察されてこなかった現象を分析し、一見手話言語独自と見られる事象が談話表示理論 (Discourse Representation Theory; 以下 DRT と省略) によって分析可能であることを示す。

2. 日本手話のロールシフト

手話言語の RS については、一般に次のような説明がなされている。

(1) Role shift or referential shift¹ (Emmorey 2002:65)

A narrative technique that is extremely common in sign language ... to express direct quotations, as well as to convey actions from a particular point of view. [手話言語でとても一般的な語りの手法で、直接引用や、ある特定の視点から動作を表現するために用いられる。]

日本手話の研究では、RS について、次のような特徴が挙げられている。(i) 文法化された引用 (木村・小藪江・市田 2003) (ii) RS と付随しておこる視線 (「見る」「考える」「見ていない」; 小藪江・木村・芳仲・市田 2000) (iii) 動詞の一致・知覚動詞・思考動詞・非手指副詞・従属節で主に見られる (市田 2005)。しかし、これらの先行研究はそれぞれ個別の体系を成しており、言語理論との関連は明らかではなかった。以下、主要先行文献の主張を概観していく。

2.1 文法化された引用

木村・小藪江・市田 (2003) では、手話言語 (日本手話) のみならず音声言語 (日本語) にも見られる特徴として「引用の文法化」を挙げている。^{2, 3} 木村他 (2003) は、引用の文法化を伴う文をさらに「契機」と「帰結」の下位範疇に分け、後者はさらに「起点」と「反応」の二つに分けられると仮定し、こうした下位範疇の組み合わせにより文構造を識別している。木村他 (2003) は、RS が表出されるのはそのうちの「帰結」の部分であり、「帰結」は次に挙げる 3 種類に分けることができると述べている。⁴

- (2) a. 接続詞化した引用部が導く節：使役・受益・因果関係
- b. 思考の NMS に続く引用部：実感・考え；「思う」の補部
- c. 間投の NMS：発見・譲歩・感嘆・迷惑 (間接受動)・恩恵 (受益)・他者の意志や感情の表現

木村他 (2003) は「引用の文法化」という観点から RS の分析を試みているが記述的な提案に留まっている。

* 本研究は日本学術振興会科研費 (基盤研究 (C)) (課題番号: JP 16K02632) の助成を受けたものである。すべての文責は第二著者にある。

¹ Emmorey (2002)では主に referential shift という表記を用いているが、本稿では role shift/ロールシフトという術語を用いることにする。

² 木村他 (2003) は「引用の文法化」として、具体的には次の例を挙げている。「～という」(伝聞・説明・限定)・「そういう」(そのような)・「～とはいえ」(逆説)・「～といて」(理由)・「～って」(話題・伝聞)・「～なんて」(感嘆)・「～とする」(仮定)・「～しようとする/しない」

³ ただし木村他 (2003) は、RS に付随すると言われている視線の移動については義務的ではないとしている。

⁴ 木村他 (2003) は、(a)～(c) の区分は必ずしも範疇的なものではないとして、複数の区分が混合した例 (i) を挙げている。

(i) 友人 (略) 食べる おいしい OK 最後 私 食べる (「他者の感情」および「因果関係」)

2.2 RS と付随しておこる視線

小藺江・木村・芳仲・市田（2000）はRSを「行動型」と「引用型」の二つに分けている。「行動型」は、おおむね動詞句に相当する部分に表出されるRSである。一方引用型は、主節の動詞の補語となっている埋め込み文の箇所にもみられるRSである。小藺江他（2000）はさらに、行動型および引用型RSに共通する非手指要素として「見る視線」「考える視線」「見ていない視線」の三種類の「視線」を挙げている。小藺江他（2000）の分類を簡略化したものが（3）の表である。⁵

(3)

	行動型 RS	引用型 RS
“見る”視線	話す／教える（一致動詞） 食べる／勉強する（他動詞） 母に食べさせられる（使役受動）	「朝ご飯いらないよ」（会話引用） 「朝ご飯いらないの？」（反応引用）
“考える”視線	味わう（複合動詞） 考える（思考動詞） ⁶ 聞く（知覚動詞） 痛い（感覚形容詞）	「『朝ご飯いらない』ってこと？」 （思考引用）
“見ていない”視線	食べる／勉強する（非手指副詞） 食べようとしたら（起動相）	「なんだ／なるほど」（判断引用）

小藺江他（2000）の研究は、日本手話以外の手話言語の研究で見られる二種類のRSに着目した上で、そこに共起する非手指動作の一つである視線の分類との関わりを示しているが、やはり記述的な枠組の提案に留まっている。

2.3 市田 2005⁷

市田（2005）でも、前出の先行文献同様、RSを「行為型」と「引用型」の二つの下位範疇に分類している。このうち行為型RSについて、市田（2005）は「描写される行為の当事者の姿勢、頭の動き、視線、表情を演じることである」と定義づけている。一方、引用型RSは「引用される発話者…の姿勢、頭の動き、視線、表情を演じることをさす」としている。市田（2005）は「図式的空間フォーマット」と「観察者空間フォーマット」という二つの概念を導入し⁸、さらに Emmorey（2002:66）の「referential shiftは、聞き手から視線を外すこと、（義務的ではないが）頭や体の位置をシフトすることによって示され、顔の表情の変化を伴うことが多い」という観察に基づいて、「（RSに付随する）視線のシフトは話し手の身体に写像されている観察者空間の描写の視点としての“観察者”を文字通り“観察する人物”として顕在化させるものである」とらえる」と述べ、「視線のシフト」および「頭の位置」といった、RSの際に共起する非手指表現身体の空間上の位置の記述的な把握に基づいた提案をしている。

手話表出者の視点の取り方を空間と一致させるなど、それまでの研究には見られなかった試みがある一方、提案の主眼が「視線」や「頭の向き」の記述に移り、RS自体の性質の理解に至るためには、さらなる分析が必要となる。

2.4 小藺江 2017

ここで、日本手話教育の観点からRSがどのように扱われているのかを見ていきたい。小藺江（2017）では先行研究を踏襲し、RSを「行動RS」と「引用RS」に二分する。行動RSは、述語が表す事象の継続を示す。一方で、引用RSは「会話・反応（聞き手・対話の相手が存在する場合）」「独白（聞き手・対話の相手が存

⁵ 小藺江他（2000）では行動型ロールシフトをさらに「動作主系（自分が座る場合）」「対象系（隣で人が座るのを見ている場合）」「相互系（隣り合って（同時に）座る場合）」に細分しているが、ここでは詳細に触れない。

⁶ 「食べる」という手指表現と「考える」という視線による複合的表現という意味で、小藺江他（2000）では「味わう」を複合動詞と記述している。

⁷ 市田（2005）も Emmorey 2002 を踏襲して、“referential shift”という述語を用いている。

⁸ 「図式的空間フォーマット」は手話表出者がその前方の空間を第三者目線で俯瞰し、「観察者空間フォーマット」は手話表出者が表出している手話表現に含まれる動作主などの視点を取ることと理解される。

在しない場合)」「判断」「思考」に区分されている。「判断」と「思考」は、手話表出者の動きが”小さい・柔らかい・ゆっくり”であるという観察も述べられている。

2.5 まとめ

ここまで、日本手話のRSに関する先行研究を概観してきた。共通してみられるのは、RSの中核をなす「視線」およびそれに付随する「頭の位置(の変化)」の記述に重点が行き、言語理論の上でRSがどのような役割を持つのかについての観察が非常に少ないことであるより言語理論に沿った分析を試みるため、RSのデータを再考していきたい。

3. データ

RSを言語理論に基づいて再考するにあたって、本研究では、手話読み取り教材の視聴覚教材からRSが頻出する箇所を取り出し、2名の日本手話母語話者による分析を実施した。具体的には、使用した動画は4本(1本の平均の長さは平均30秒程度)で、日本手話母語話者が動画に記入する形で分析した上で別の日本手話母語話者が注釈ソフトELANで「粗訳・逐語訳・非手指マーカー」といった注釈を記入していった。

分析の結果、日本手話のRSにおいて、これまで言及されてこなかった、以下の二つの特徴が判明した。

- (A) 日本手話のRSの表出の際、対象物をまず指差ししてからその対象物の名詞を手指で表出する。
- (B) 一人の手話話者の身体で、同時に複数人の会話をRSにより表出することが可能である。

以下、この二つの特徴を順に検討していく。

3.1 対象物の名詞の義務的先行性⁹

まず、RSが始まる前に、必ずRSの対象物が導入されるという点を示すデータを見てみる。

- (4) a. pt (うなぎ) /うなぎ/泳ぐ/怖い/怖い/怖い/住処から出てきて泳ぐ/否定 [うなぎ]
‘うなぎが、「怖い」と住処から出て来ない’ (pt(うなぎ) = うなぎの場所の指差し)
- b. *pt (うなぎ) /泳ぐ/怖い/怖い/怖い/住処から出てきて泳ぐ/否定
- c. *うなぎ /泳ぐ/怖い/怖い/怖い/住処から出てきて泳ぐ/否定

(4)の手話表現では、冒頭の「pt(うなぎ)」と「(手指表現による)うなぎ」は、同じ意味の表現であり、一見同語反復のようである。しかし、(1b-c)の非文法性が示すように、そのどちらが欠けても適切なRS表現とは判断されない。(5)も同様の例で、RSに先立って文中に現れる「pt3(うなぎ)」と、手指で表出された「うなぎ(顔エラ)」は、どちらも不可欠である。¹⁰

- (5) ... /月/上/月(うなぎ) /上/いる(口型:おる) /*pt3(うなぎ) /*(うなぎ(顔エラ)) 泳ぐ/怖い / ...
‘月が出ていると、うなぎがこわいと...’ [うなぎ]

(4)(5)は行動RSの例であるが、引用RSでも同様の現象が見られる。(6)はRSの前に出てくる名詞句が修飾節を伴うため、指差しの後にも手指表現が続くが、基本的には(5)と同種の構文である。

⁹ 本稿で使用する略号は、次の通りである。

pt: (文法化された) 指差し loc: 場所を示す空間 1~3の数字: 人称 □: RS (の範囲)

また、各例文末の[]内の略称は、参照した動画を識別するためのものである。

[うなぎ]: 話者が自分の兄に、夜ウナギ釣りにいった話しをする動画

[英国]: 話者がイギリスに旅行した際、ことばがうまく通じなかったエピソードの話しをする動画

[麻雀]: 話者が学校で麻雀をして先生に見つけた話しをする動画

[坊主]: 話者が、クラスメート全員が坊主になった、ある学校のエピソードを紹介する動画(本稿では取り上げない。)

¹⁰ RSに先行する名詞句が代名詞的表現の場合は、指差しと代名詞表現が一体化していると考えられる。

- (6) .../*(先生)/*(pt (男) /管理/当番/いた/男)/うなずき/反応/音/変/... [麻雀]
 ‘見回り当番の先生が、「うん、何か音がする、変だなあ」と ...’

このように、行動・引用のどちらの RS にも、導入部に指差しを伴う名詞句の存在が必要であることが明らかになった。¹¹

3.2 多重的ロールシフト

次に「(B) 一人の手話話者の身体で、同時に複数人の会話を RS により表出することが可能である」を示す例を見てみる。この場合、表出されている複数の会話従事者がすべて等しい重要性をもつ訳ではなく、必ず主要となる従事者が識別される。

- (7) [パン屋の店員と話者の会話]
 /否定/(a)loc3-歩く-loc1/pt1/つかみ揺らす/(b)襟首をつかまれる/(c)襟首をつかまれる (横向き) /
 (d)襟首をつかまれる (自分を指差し) / (e)襟首をつかまれる (耳を指差し) /
 (f)襟首をつかまれる (右手を左右に振る) /襟首をつかんだまま耳を指差す/ ... [英国]
 (loc3: 店員の位置 loc1: 話者の位置 pt1: 自分 (話者) の指差し)
 ‘店員は「だめだ！」と言って、僕の方に歩いてくると、僕の襟首をつかんで揺さぶった。襟首をつかまれた僕は (店員に向かって)「僕は聴こえないし話せない」と言った。店員は「君は聴こえないのか ... 」と言って ...’

(7) において、並線部は店員の RS、それ以外の部分は話者の RS である。囲み部の話者の RS に関して、(7a) は身体自体は話者が襟首をつかまれている様子を表しているが、その右手は歩く店員を表現している。また、(7b-f) は、体は話者を表しているが、右手のみ (話者の体をつかんでいる) 店員を表している、という点で、分析をした二人の日本手話話者の見解は一致しており、あいまい性は見られない。

3.3 まとめ

この節では、日本手話の RS に関して、次の二つの特徴が見られることを示した。

- (A) 日本手話の RS の表出の際、対象物をまず指差ししてからその対象物の名詞を手指で表出する。
 (B) 一人の手話話者の身体で、同時に複数人の会話を RS により表出することが可能である。

次の節では、この二つの特徴がどのように言語理論に沿った形で分析されるのかを見ていく。

4. 分析

4.1 対象物の名詞の義務的先行性とファイル更新

上記 (A) (B) は、一見音声言語とは大きく異なる特徴であるが、どちらも談話表示理論 (Discourse Representation Theory; 以下 DRT) の概念を適用した分析が可能である。まず (A) に関しては、手話言語における Novelty/Familiarity Condition (Heim 1983) の具現化と考えられる。Heim (1982, 1983) は、談話に新しい要素が加わることを、「ファイルの追加」と呼んでいる (詳細は Appendix を参照のこと)。

¹¹ ただし、総称の表現を含む文では、RS の前に指差しを伴う名詞句は表出されないようである。次の文は、「一般にろう者というのは麻雀牌の音がわからない特質を有している」ということを述べる文であるが、この場合は指差しが RS の前には見られない。

- (i) ろう (うなずき) /不便/麻雀/ろう/音/わからない (うなずき) /... [麻雀]
 ‘ろうというのは不便で、麻雀牌の音がろうにはわからないよね...’

(8) The Novelty/Familiarity Condition (Heim 1983)

Let F be a file, and let p be an atomic formula in the LF representation. The file-incrementation $F + p$ is defined only if for every NP_i that p contains, if NP_i is definite, then $x_i \in \text{DOM}(F)$, and if NP_i is indefinite, then $x_i \notin \text{Dom}(F)$. Otherwise, $F+p$ is undefined.

(LF表示において、 F をファイル、 p を元となる定式とすると、ファイル増加の手続きは次の場合に定義される： p に含まれるすべての NP_i に対して、 NP_i が定名詞句である場合は、 F の領域内に x_i が含まれ、 NP_i が不定名詞句である場合は、 F の領域内に x_i が含まれない。それ以外の場合はファイル増加($F + p$)は定義できない。)

換言すると、(4a)の冒頭の省略不可な「pt (うなぎ)」は、Heim (1982, 1983)において「不定名詞が“新しいカード (変項)”として談話に導入される」という過程を可視化したものと考えられる。¹²

4.2 多重的ロールシフトと談話役割「Pivot (軸)」

(B)に関しては、DRTを用いて談話照応形の分布を分析した Sells (1987) の提案する談話役割により分析可能である。Sells (1987) では、談話照応性を捉えるために、下記 (9a-c) の3つの談話役割を提案し、さらに(談話役割とは独立した概念として) (9d) EXTERNAL SPEAKER (外部の話者) を提案している。

- (9) a. SOURCE (情報の源)
- b. SELF (感情の主体)
- c. PIVOT (軸；視点の持ち主)
- d. EXTERNAL SPEAKER (文の外部の話者)

(7b-f) は、一人の話者が複数の談話従事者を RS により表現しているが、「主体」とみなされるのは顔が表出している従事者である。すなわち、(2b-f) では、顔 (および頭・首) が表現しているのは話者なので、右腕が表現している店員が主体にはならない。

(7') ((7)の訳として)

'...*襟首をつかまれた店員は (僕に向かって) 「自分 (=店員) は聴こえないし話せない」と言った...'

これをふまえて、(7) のような場合、日本手話では Sells (1987) の提案する談話役割のうち「"Pivot"が"手話表出者の顔"と一致する」と提案する。

4.3 まとめ

上述の分析をふまえて、(A) (B) をより正確に記したものが以下の (A') (B') である。

- (A') 日本手話の RS の表出の際には、The Novelty/Familiarity Condition により、まず指差しによって対象物を談話に導入する。以降の RS はファイルの保持 (およびそれに伴うファイルの追加および更新) である。
- (B) 一人の手話話者の身体で、同時に複数人の会話を RS により表出することが可能である。その際は、手話表出者の顔が Pivot の談話役割を担う文中の登場人物と一致する。

5. おわりに

本研究では一見手話言語特異に見えて、従来は個別の身体的特徴の記述でのみ把握されていた日本手話の RS のデータが、DRT を用いれば音声言語と同じ枠組みで分析可能なことを示した。

¹² RS の前に表出される指差しは、指標 (index) の可視化されたものという可能性もある。ただし、Heim (1982) は、自身のファイルを用いた意味論において、indexing を最終的には導入しない立場を取っている。

Appendix:

Heim (1982, 1983) での、談話におけるファイル追加の例として表 (I) のような過程が含まれていると考える。A と B の会話の際、A がのような発話をしたとする。発話開始前は、B のファイルは空であるが、A が (a) を発話すると、B は 2 枚の新しいファイルを追加する。次に A が (b) を発話すると、B はさらに新しいカード 3 を追加した上で、既存のカード 1 および 2 の情報を、新しく追加されたカード 3 に基づいて更新する。(c) の発話に基づいてさらにカード 3 が更新され、(d) の発話に基づいてカード 2 がさらに更新される。

(I)

A の発話		B のファイルの状態
発話開始前 :	時間 の 流 れ ↓	∅
(a) A woman was bitten by a dog.		カード 1 「1 は女性である。2 にかまれた。」の追加 カード 2 「2 は犬である。1 をかんだ。」の追加
(b) She hit him with a paddle.		カード 3 の追加 「3 はパドルである。1 は 2 を叩くのに使われた。」 カード 1 の更新 「1 は女性である。2 にかまれた・2 を 3 でぶった。」 カード 2 の更新 「2 は犬である。1 をかんだ・1 に 3 でぶたれた。」
(c) It broke in half.		カード 3 の更新 「3 はパドルである。1 は 2 を叩くのに使われた。・ 二つに折れた。」
(d) The dog ran away.		カード 2 の更新 「2 は犬である。1 をかんだ・1 に 3 でぶたれた。 逃げた。」

引用文献 :

- Emmorey, Karen. 2002. *Language, cognition, and the brain: Insights from sign language research*. Mahwah, New Jersey/London: Lawrence Erlbaum.
- Heim, Irene. 1982. *The semantics of definite and indefinite noun phrases*. Doctoral dissertation. Massachusetts Institute of Technology.
- Heim, Irene. 1983. File changing semantics and the familiarity theory of definiteness. In R. Bauerle, R. Schwarze, and A. von Stechow, eds., *Meaning, use, and interpretation of language*. Berlin: De Gruyter.
- Sells, Peter. 1987. Aspects of logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18, 445-479.
- 市田泰弘. 2005. 日本手話の文法 (3)~(5). 月刊言語 第 34 卷 7-9 号.
- 小藪江聡. 2017. 土曜日特別講座 ~文法 (NMM)・RS ~. 2017 年 7 月 22 日使用のスライド.
- 小藪江聡・木村晴美・芳仲愛子・市田泰弘. 2000. 日本手話におけるロールシフト. 日本手話学会第 26 回大会 予稿集, 8-11.
- 木村晴美・小藪江聡・市田泰弘. 2003. 日本手話における引用の文法化. 日本手話学会第 29 回大会予稿集, 20-23.